

第3回吹田市シティプロモーションアドバイザー会議 議事要旨

1 日時：平成30年2月6日（火）10：00～12：00

2 会場：吹田市役所 高層棟4階 特別会議室

3 出席委員

森副委員長（吹田青年会議所）

内海委員（近畿経済産業局通商部国際化企画調整官（頑張る自治体応援隊 大阪北部担当））

大林委員（ジュピターテレコム 関西メディアセンターアシスタントマネージャー）

菅原委員（サンケイリビング新聞社編集部デスク）

春貴委員（NPO法人市民ネットすいた理事）

東山委員（吹田商工会議所青年部事務局長）

大塚委員（市民委員）

村上委員（市民委員）

4 出席職員

熱田次長・田中参事・佐納主幹・白澤主査・堀主任

（傍聴者なし）

5 案件

（1）前回の会議でのご意見に対する市の考え方について

（2）今年度の事業実績と来年度の展開について

6 主な意見等

【案件（1）について】

（副委員長）

田中委員長が欠席につき代わりに進行をさせていただきます。今回は最後の回ということで、実際に実施している事業についてご意見をいただいたり、直近の実施事業、今回は前回の振り返りと平成30年度に向けての案件となっている。外部委員で構成されているが、実際の事業にも影響してくる責任のある会議なので、その点を念頭におきながら活発なご意見をいただきたいと思う。

（委員）

すいたんファンクラブの設立について、観光協会が取り組んでいる活用事業との兼ね合いはどのようなになるか。

（事務局）

以前はイメージキャラクター活用事業として観光協会に委託していたが、現在は市が直接実施している。すいたんは情報発信プラザにおいても大きなツールとして考えているので、ホームペー

ジで活用したりしている。ファンクラブ設立について、観光協会も主体の一つになることも選択肢の一つだが、これまでとは全く違う切り口でも良いのではと考えている。

（委員）

すいたんファンクラブはどのような形が吹田市のシティプロモーションにとってふさわしいのかはもっと考えないといけないと思う。継続性や多世代の関わることのできる仕組みについて慎重に考えていかないといけないと思う。

（副委員長）

誰が主体になって声を上げていくかが重要だと思われる。すいたんが好きな人が集まって話してみようという会があってもいいのでは。

（委員）

吹田の名物について、健都に絡めて吹田市公認のメニューを作ってすいたんとコラボして発信していくのが良いのではと考える。すいたんだけを推すのではなく、商工会議所とも連携しながら。一つのコンセプトを押さえた上で取り組むことが必要。

（委員）

すいたんについて、ある程度の認知度はあると思うがキャラ設定が十分でないと思う。すいたんが吹田市のキャラクターで、くわいがモチーフになっていることは知っているが、それ以上の何かについてキャラづくりをしていくタイミングであると考えている。優しいキャラクターなのか、毒舌のキャラクターなのか、すいたん自身もキャラ作りを進めることでファンも増えていくと思うし、すいたん自身のプロモーションを進めていく必要があると思う。吹田の名物料理についてくわいを使ったハンバーグやお酒にも合う料理を考案して、イベントで出展をするというスタンスで広めていくということが大切だと思う。単に料理教室を開催しただけではなかなか広まらないと思うので、たくさんの方が集まるイベントで地道なPRを続けることが大切だと思う。

（副委員長）

くわいの生産量はイベントに使用できるくらい安定した供給があるものなのか？

（事務局）

現状では一般的なスーパーに流通するだけの量はない。そういったイベントで使用する場合にはあらかじめ生産者に依頼をすることで、必要分を確保するようなやり方になる。ただ収穫量も変動すると聞いている。生産者との調整にもよるができないわけではない。

（委員）

くわいは普段食べる食材というイメージはない。吹田に住んでいるわけではないが、吹田くわいの話はよく耳にする。生産量が少ないとできることは少ないが、もっと増やすような取り組みはあるのか？他市に住んでいても手に入れることができれば良いと思う。

（事務局）

吹田くわい保存会などが少しずつでも増やしていく取り組みをされているが、耕作面積が少ないことや農業者自体が少ないこともあり、なかなか難しいと聞いている。朝市などで数量限定で販売している例はあるが、すぐになくなっていく状況である。

（委員）

すいたんのキャラ設定の必要性についてはその通りだと思う。機運がある時期に慎重に考えなが

らもスピード感をもって取り組む必要があると思う。早急にすいたんの方向性を考えていく検討委員会のようなものを起ち上げて、すいたんファンクラブ設立にもつながれば良いと思う。

（副委員長）

イベント等ですいたんをよく目にするが、確かにすいたんのモチーフが吹田くわいであるということ以外はあまり知らない。人に聞かれた時に説明や紹介がしにくい現状にある。

（委員）

シティプロモーションをダイナミックに進めていくことについて、行政としてたくさんの事業を実施している中でシティプロモーション推進室の限られた人員でそれらをフォローしていくことは大変だと思うので、各部署を後押ししていく形にならざるを得ないとは思いますが、それぞれの事業部門がどこまでレベルアップしていくかという目標をもって、どれくらい達成できたのかを見極めて、具体的なレベルアップを目指した後押しをすることでより効果的になると思う。

（委員）

吹田くわいに関することをフェイスブックに投稿したことがあるが、ずっと吹田に住んでいる方でも吹田くわいを食べたことがないというコメントがあった。まず食べていただく機会を作ることが大事だと思う。一度食べてみておいしいと思うと次につながると思う。きっかけがあればもっと身近に感じられるのでは。

（委員）

吹田市長の認知度は近隣の市長より高いと思う。市長のキャラクターは面白く、人懐っこく、いじりがいもあるので、まず先頭に立って市のPRに取り組むことが一つのやり方ではないかと思う。都道府県レベルでは知事がどんどんPRしている。その感覚で吹田市民に吹田の魅力を発信するという立場でどんどんPRしていくものであっても良いと思う。

（副委員長）

先日市長がテレビに出演していたり、イベントで挨拶を聞くことはよくあるが、もっと市民に対するプロモーションは可能だと思う。

（委員）

市長によるPRの活用はありだと思うが、どんどん前に出ていくことについて、選挙へ有利にならないかなど行政として懸念する部分はないか？

（事務局）

広告塔としてどんどん前に出る首長もいれば、事務方が先頭にたってそれを追認するような形などやり方は様々なので、手法として制限されるものではないと考えている。

（委員）

まずは知ってもらおうきっかけが大切だと思う。

（副委員長）

市にとって良いことであれば、まずはやってみることが大切。

（委員）

吹田まつりについて、新たな取組についてはターゲットを絞って実行委員会で共有しながら進めてもらいたいと思う。

（委員）

市長によるPRについては選挙で市長が交代するリスクも踏まえた計画が必要だと思う。

【案件（2）について】

（委員）

NTT西日本との連携協定について、汎用性があるツールを使うのか、もしくは独自のものを作り上げていくのか？

（事務局）

汎用性があるものを使用するパターンもあるが、ただそのまま使用するだけでなく何らかの吹田の要素を盛り込むことで独自のものとしていきたい。例えば位置情報サービスの活用について、健都のまちづくりと絡めたイベントすることで吹田の独自性を出すことができる。

（委員）

独自性を出していくことはなかなか難しいところも多いと思うが、ぜひ頑張っていたきたい。

（委員）

自分の会社のキャラクターはたくさんのグッズがあって、雑貨屋などでも販売している。すいたんのグッズは自分の世代では少し使いにくい。市章を使ったグッズとか、いろいろなパターンがあっというと思う。いろんな世代にあわせたグッズの展開も検討していただければありがたい。名刺についていろいろなパターンがあっというと思う。市役所の方とよく名刺交換をするが異動が多く最新のものがわからないことがあるので、〇〇年バージョンとかが書かれていたり、顔が入っているとありがたい。ピンバッジについても職員の方みんなが付ける期間があってもよいのではと思う。

（委員）

プロモーショングッズはイベント等で使っているのか？

（事務局）

イベントでの活用の他、ワークショップの参加者へ記念品として渡したりしている。

（委員）

シティプロモーション提案プロジェクト enZINE の活動をもっとオープンにしてもよいのでは。それ自体も情報発信につながってくと思う。

（事務局）

成果物は広く公表しているが、活動そのものの周知は庁内にとどまっている。どのような形で公開できるかについては検討していきたい。

（委員）

年賀状の取組について、どの年齢層が購入したのか等のマーケティングのような分析はできているか？

（事務局）

まず作成枚数の検討から始めたが、完売できたことは一つの成果と考えている。完売後も数多く問い合わせをいただけたことから、想定以上の需要はあったと考えられる。購入された年齢層も幅広かった。4種類のデザインですいたんのもが一番初めに完売したことから、すいたんの人気についても改めて気づかされた。何歳代が何件という細かい統計は集計できていないが、すい

たんの人気を確認できたことも一つの成果であると考えている。今のところ次年度に継続して作成する予定はないが、例えば今後市制施行 80 周年のような記念行事で販売する機会があれば、今回の一連の成果や課題を踏まえたものにしていきたい。

(委員)

販売箇所が市役所と情報発信プラザの 2 個所であれば統計も取りやすいと思うので、今後機会があればぜひ分析に取り組んでもらいたい。

(委員)

NTT 西日本との協定について、位置情報サービスを活用したまち歩きイベントとはどのようなイメージか？

(事務局)

まち歩きについては市の魅力を知っていただける機会になるものと考えている。そこに ICT の要素を絡めることで、例えばあるポイントに行くだけでスタンプを集めることができるデジタルスタンプラリーのようなことが可能となる。今までになかった楽しみ方ができることで、参加者の世代も広がるのではという期待も持っており、様々な主体との融合も可能となるのではと考えている。

(副委員長)

ICT の知識が無い方から思わぬアイデアが出る可能性もあるので、そういった意見を収集してもらいたい。

(委員)

すいたんのキャラ設定について、登場する場面によって幼かったり、やたらとしっかりしていたりするのでもう少し統一しても良いかと思う。すいたん LINE スタンプの作成は吹田市か？

(事務局)

すいたん LINE スタンプは市内の業者が作成している。すいたんの商業利用については、利用を希望する事業者からの申請に対して吹田市が許可をするという形となっている。

(委員)

市の取組の成果は資料で理解できるが、市民や事業者がいかに吹田のシティプロモーションに貢献しているかの情報収集も重要で、たとえば市民や事業者が取り組んだ事業を表彰や認定をしてお墨付きを与えたりとか、市民や事業者の取り組みを拾い上げる仕組みが次年度以降できれば良いと思う。今後のシティプロモーションについて市全体だけでなく、もっと健都のような地域性にも着目したプロモーションがあっても良いのではと思う。

(副委員長)

様々な主体がシティプロモーションに取り組むことを考えた中で、どこが横串を刺していくかというやはり行政が声をかけたりして情報を収集していくことになるのかと思う。

(委員)

外との関係だけでなく市内の関係に目を向けてもらいたい。市報には多くの情報が掲載されているが、シティプロモーション推進室からの発信が少ないように感じている。税関係などのベーシックな部分も多いと思うが、各部署が実施していることはシティプロモーションに関わりが深いことも多いと思う。広報担当との連携も重要だが、シティプロモーションの観点から「今月は特

にこれ！」といった、とっておきのような情報を市民に打ち出して、市民が市のファンになるポイントに重点を置いた見せ方があっても良いのでは。そうした内部での連携を深めることで情報収集をして、戦略的な発信につなげていけば良いのではと思う。

（副委員長）

シティプロモーション推進室の役割として様々な部署との情報共有は重要である。そのような動きは自ずと横串を刺す動作につながっていくと思う。

（委員）

SNS萎えという表現を聞いたことがある。SNS映えが流行っているが、すぐに次のものに移り変わってしまう。世の中のスピードはとても速く、何かを実施するにもタイミングも非常に重要となる。

（副委員長）

高校生でもLINE離れが進んでいて、逆に50歳代、60歳代で増加しているという話もある。SNSの充実ということだが、なくなっていくSNSもあると思うので、2、3年後にどうなっているかという情報を収集していかなければ、今あるからといって、2年後にはなくなっている可能性もあるので、そのあたりの動きについても研究してもらいたい。

（委員）

前回は提案した吹田検定についてはどのような状況か？

（事務局）

吹田検定の実施については前向きに検討していて、来年になるか、もう少し時間がかかるかは未定だが、現在検討している特派員制度で検定に使えるような情報を集める仕組みも考えている。

（委員）

シティプロモーションにおけるアナログとデジタルの部分のバランスはどのように考えているか？

（事務局）

デジタルコンテンツは利便性や話題性が高く、シティプロモーションのツールとしての可能性は高いものと考えているが、行政の取組としてそれに全て置き換わっていけばよいのかというと、決してそのようなことはないと考えている。ただ、やってみなければわからない部分もあり、今までになかったことへのチャレンジは重要であると考えており、その中で残していく部分、新しくしていく部分が二者択一ではなく、共存できるやり方を考えていきたい。

（委員）

ケーブルテレビの「お元気ですか市民のみなさん」の視聴率はどれくらいか？

（委員）

去年実施したアンケートでは7割くらいの世帯に認知されていた。月に3回の放送だが、YOUTUBEでも見られるようなこともPRしていきたい。市役所のトップページにでているとありがたいが難しい事情もあると思う。まずは放映していることをPRしていきたい。

【アドバイザー会議に参加した感想について】

（委員）

アドバイザー会議の名前のとおり、いい角度からの意見が多く、良いアドバイスができる集まりだったと思う。こういう場自体があることが大切だと思うことと、例えば先程の認定制度が実現できればこの会議で検討するという活用の仕方もあると思う。いろいろな活用が実現できれば良いと思う。

（委員）

2 回だけの参加だったが様々な意見を聞くことができた。ただテーマがいつも漠然としていた部分があったのでもっと具体的であれば、会議ごとに意見の到達点も確認できてわかりやすかったのではと思う。

（委員）

色々な立場の方の意見を聞いて、自分自身がこれから何ができるかを考える良いきっかけとなった。既成概念にとらわれずに柔軟にできることを考えていこうと気持ちを新たにすることができた。

（委員）

非常に勉強になった。特に市民委員の意見がリアルに響いてくるところがよかった。今後も市民委員の意見を踏まえて議論を交わす場であってほしいと思う。ただテーマがもう少し絞られていればよかったと思う。

（副委員長）

事前の配布資料についてももう少し煮詰めることもできたと思うので、今後検討していただきたい。

（委員）

北大阪のエリアの番組を製作していて、他市の情報をよく耳にするが、吹田市の上品な部分は最後まで抜けなかったと思う。シティプロモーションの究極とは何かを考えた時、結論としては幼児教育にあると考えている。子どものときに学んだことや昔話はよく覚えていて、そこで吹田のことをいかに子どもたちに伝えられるかだと考えている。吹田検定もそうした意味からの提案で、例えば保育園や幼稚園の時に絵本で吹田のことを植え込まれていたら、10年後、20年後にも生きてくると思う。そこはSNSが廃れても変わることのないシティプロモーションの本質の部分だと最終的に感じた会議だった。

（委員）

ガンバ大阪との連携がいくつかあったと思うが、参加した人が元気になるだけでなく、元気を伝えるようなイベントになれば良いと思う。会議にあがらなかったがもっと民族学博物館のような埋もれている魅力ある資産が多くあると思う。もっと掘り起こしていただければと、応援の気持ちも込めて期待したいと思う。

（委員）

幼少のころから吹田で過ごしていて、人生の80%を過ごしている。一時期吹田を離れたがまた戻っている。それはなぜかという幼少期に埋め込まれたここが良いという感覚によるものである。住み続けるためには子育て世代への仕掛けづくりは重要だと思う。今回の会議でその部分を改めて認識できたり、市報を改めて読み込むようになったり、吹田をより良くしたいという郷土愛が強くなった。リタイアした後も何か地域に貢献できないかを考えるきっかけとなった。

（事務局）

今後、吹田まつりの50回や市制施行80周年を迎えるなかで、どのようなPRにつなげるかについて非常に参考になった。次年度についてもこのような場は設定していくので、ぜひよろしくをお願いします。

（副委員長）

今回の会議のメンバーが集まったことについては奇跡的な巡り合わせと考えていて、3回の会議ではたくさん勉強させていただいた。シティプロモーションを考える上では、吹田に住んでいなくても吹田に関わっていたり、様々なバックグラウンドを持っている方がいて、その人に合わせた発信が必要で、研究する余地はたくさんある。今後もこのアドバイザー会議がより幅広い方々の意見を取り入れながら、実行性のある事業につながっていけば良いと思う。